

紹介

食物と心臓

柳田國男著

書肆創元社がその選書のうちに柳田國男先生の論集を引續いて刊行し既に十冊に及んだことは、私どもにとつて喜ばしく且つ興味ある事實であつた。

今日ではもはや民俗、民間に永く傳承され繼行される生活現象とそれを貫く國民精神とをもつて、歴史的な存在と認めることを躊躇するものはない。日本民俗學が國史を知るために大きな意味をもち、強い主張をもつことも間然するところはないのである。かうした機運は時代が當來したものと言へるかも知れない。緊迫した世相のうちに、國民的自覺の高潮が必然の勢を驅つて國史の認識を深めしめるに大きな役割をとり、傳統的な歴史研究のみならず、それと併行して民俗學に對する關心の高まりを身近く感ずることが出來たのは、併しながらひとへに絶えずこの氣づかれざる學問の興隆と、延いては國民文化の向上を專念された先生の御努力に基くものであり、今日の繁榮は先生の拓かれた地盤に抵すものであつたのである。

さて「食物と心臓」の一巻、收むるところの論文十三篇はすべて食に關する歴史的生活の解明を試みられたものである。先に同じ選書として現れた「木綿以前の事」には女性の生活を説いて、多く服裝の問題に觸れられたが、こゝに食品と食制とを主題として論考をまとめられた。日常生活の最も大きな要件のうち二つはあかあかと燃えつゞける炬火を得て無知の暗黒から照り出され、われわれの眼前にそれと指呼されるまでに見現はされたのである。

食物のやうな平凡なる毎日の生活にも、まだ隠れた問題が幾らもあつたといふことを認めてもらふ以上に私の主張はないと先生は述べておられるが、この平凡ではあるが重要な生活條件に如何にわれわれは冷淡であつたか。古い傳統を誇る歴史の學問とその成果とはこれに就いて少しも貢獻するところがなく、そこから學び得るものもなかつたと云つても過言ではあるまい。日に三度、つづ繰返して箸をとりながら、そこから何ものをも味ひとれなかつたのである。尤も三度と言つても以前には常の日の食時は二回が一般であつたのであるが。

永い間父祖から子孫へ傳承し反復して持續し來つた類型的な生活現象が歴史としての意味を見出されなかつたために、徒らに忘却の彼方に漣滅されてしまつたことは是非もないが、たまたま取上げて記録し、解釋をかへることはあつても、それは今日獨斷偏見としか思はれぬものゝみであつたのは悲しいことであつた。この古い解説に對する不信用から出發して、新しい疑問を自出し、新しい方法で前代の日本人の意識した傳承を理解しようとする希

望と期待とから、平凡な生活のあらゆる部分に互つて分拆が試みられた。新しい方法と云ふのは端的に云へば比較することであつた。諸國の郷土生活のうちに傳承される夥しい事實に就いて、彼此比較することによつて前代の生活の意味を汲みとるのであつた。かくすることによつて歴史は縦のあり方から更に横の構造に於いても把握される様になる。

たとへば食制つまり食べ方に就いても、かう云ふことが歸納される。食べ方は口へ持つて行く一種しかない様なものであるが、實は變化があつて、通例は家内限り、或時には他人を喚び又集まつて食べ、食べる時と處にも定つた約束があり、多くの食品はそれぞれに或食制を伴うてゐると云ふことが。以前は共同飲食が食事の常の姿であつたのである。これには食物に或精神的な力を考へ、これを共にすることによつて、共同の生活の幸福と利益とを保障しうると考へたものであつた。さうした事實は豊富に集められてこの書のうちにある。たゞこれらの零細な資料からこれまでに説き明めたのは何と云つても先生の力であつた。

われ／＼はたゞ徒らに鼓腹して楽しむものではない。食物も腹を満す物質のみではない。栄養學の教へるところをもつて簡単に調理しきれものではなかつたのである。たゞカロリーの計算やビタミンの適合ばかりでは消化しきれないものであつたと云ふことを、これらの文章を咀嚼することによつて玩味しなければならぬ。先生の與へられたところは決して豪華な食卓であるとは云へないかも知れないが、われ／＼を慈しみ育くむ老家刀目の温い

心づくしの膳部であつて、材料は皆家のうちにある。出前仕出しの類は斷じて加つてゐない。それゆゑわれ／＼は安んじて身の養ひとしてこれに向つて座ることが出来るのである。

(目次)

食物と心臓。米の力。生と死と食物。モノモラヒの話。酒もり鹽もり。身の上餅のことなど。トビの餅・トビの米。餅なほらひ。午餉と問食。幸福の木。田作りまな祝ひ。のしの起源。食制の研究。

(創元選書第四十五、一圓五〇錢) (平山敏治郎)

鸞 鳳 帖

小林 正 直編輯

近時宸翰に關する關心が急角度の上臈を來し、多くの文化史展は宸翰を中心とするかの感があり、多くの蒐集家は萬金を投じても宸翰を手に入れんと努力するに至つた。宸翰に對する此の傾向は、一應、覺ぶべきものであらう。

鸞鳳帖は在東京の小林正直氏が蒐集された宸翰四十四點に加ふるに皇族の御筆になる御消息御短冊を以てし、附するに國寶に指定された榮華物語、重要美術品に指定された歌切等、すべて七十九點を玻璃版として上梓頒布せられたものであり、別に、これに就いての讀本を一册添へられたのは、親切な心遣である。

小林氏はもと洛北修學院離宮の附近に生れられたが、従つて祖先以來皇室に對し奉りては特別の忠誠を致された家柄であつた。